

肢体不自由児を対象とした支援学校には様々な障害をお持ちの生徒さんが在籍されておられます。私が、たまたまそんな現場に配属されたのが、今から40年近くも前の事。当時は、自分の手では文字が書けない生徒さんを対象に、タイプライターの活用研究が盛んでした。手に鉛筆を持つ代わりに、キーを打つことで文字を「書く」。つまり、自助具の活用です。

タイプライターの場合、ひらがなはともかく漢字を打ち出すのは大変。何千何万という文字があるのですから。そうしたなかで開発されたのが日本語ワープロ。限られたキーを打ち分けることさえ出来れば、ワープロの変換機能によって思いのままの漢字表現が可能になりました。

その後、ワープロだけでなく、お絵かきソフトをはじめ各種アプリケーシ

ョンが開発され、生徒さんの自己表現の可能性は大きく広がりました。また、ソフトだけでなく「視線入力装置」などハードウェアの面でも大きな進歩が見られています。

しかし、ソフトとハード両面の技術革新が進んできたという事は、教育現場に希望の灯をもたらすと同時に、その技術的進歩を現場の教員も学び続ける必要があることを意味します。

しかし、教育現場には多種多様な課題が山積しています。自分一人で解決するのは至難の業。そんな観点から、私自身は多様な最新の技術を持つ方たちとの交流を深めてきました。退職して10年近くになりますが、そんな方たちと教育現場をつなげる仕事を今後も続けられればと思っています。

退職教職員等の方々が地域社会における教育活動に参加することで、学校や地域における教育の活性化を図るとともに、自分自身の社会参加、生きがい、健康づくりに資することを目的とする「退職教職員等ボランティア事業」を互助会は実施しております。その活動の一部をご紹介します。

